第７０期生に聞く「幹候校入校準備」



陸上自衛隊幹部候補生学校
第３候補生隊第１区隊
一般幹部候補生　陸曹長　井村　水咲

私は現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第１０７期一般幹部候補生BU課程に入校中の防衛大学校第７０期卒業生、地球海洋学科、少林寺拳法部の井村水咲です。

陸曹長という階級を付け、幹部候補生として約5か月を過ごした現在、防衛大学校（以下、防大と記載）の後輩たちに向けて、思うところを幹部候補生学校（以下、幹候校と記載）入校前の自分へ助言するつもりで言葉を記そうと思います。防大生でいる間の関心事項は、幹候校の生活環境や指導部の指導だと思います。関心への答えは、「期別による」となります。当たり前のことですが、人の組み合わせ方や部隊長の考え方、入校した時期が異なれば、同じ名前を冠していたとしても、異なる組織になるからです。先輩からの申し送り等は全く参考にならないとは言いませんが、従来のやり方を踏襲するより、自らが所属する組織で生活していく中でルール作りをしていく方が良いと個人的には思います。防大を卒業した少し未来の自分から防大時代に準備しておいた方が良いと思うことは主に2つあります。端的に記せば、自衛官を職業にする覚悟と豊かな知識及び豊富な経験をもつことです。

まず、覚悟をもつことについて述べます。防大を卒業するためには１５２単位以上の取得が求められますが、幹候校では学術だけではなく各種検定等の合格が求められます。各種検定等とは、全4回ある課目試験、体力検定、高良山登山走検定、武装障害走検定等であり、種目は多岐に渡ります。候補生は、これらの検定で基準に到達することが最低限すべきこととして求められます。検定に合格するためには、「戦いの焦点に立つ」ことが大前提です。良い点数を取りさえすれば、ある程度の欠課日数まで許される防大とは異なり、万全でも準備不十分でも、無事検定の日を迎えて参加することは当然のものとして、さらに基準に到達することが求められます。怪我や病気で講義や訓練、検定に参加できなければ追検定などもありますが、求められるべきものはあくまで検定に参加し合格です。示された基準に達することは、候補生たるものの義務とも言えます。卒業をすれば小隊長として部隊を率いていくことになるからです。有言不実行の部隊長についてきてくれる部下はいません。部下に教育・指導をする者として最低限定められた基準は涼しい顔で突破できるくらいまで苦手なことでもできるようにならなければなりません。陸上自衛官には、厳しく辛い環境であっても我慢して倒れず、ひいては他人に手を差し伸べることができる強靭な精神力と体力、めまぐるしく変化する状況に対応出来る柔軟さの両方が求められます。自衛隊に入隊したきっかけは何であれ、組織への思いがどの程度であれ、緑の迷彩服に袖を通して勤務する上では、個人の事情

は関係ありません。しんどい、もう無理だ、なんでこんなことしなければならないのだと思ったとしても部隊行動を続けるため、どんな状況でも必ずやり遂げる覚悟が必要です。

次に、知識と経験を得ることについて述べます。個人的に幹候校という時代は、知らないことを知る術を学ぶ期間だと思っています。部隊運用の正解は、検索しても答えは出てくることはありません。できない・分からない自分と常に向き合い、体や頭を酷使して、部隊の尺度や膨大な知識を獲得し、それらを総合的に活用して、これが最良の行動だと自ら判断して行うものだからです。幹候校での生活は、課業中はいわゆるフルコマ状態であり、毎日膨大な量の知識が付与されます。一方で、課業外は時間の縛りがほとんどなくなります。ゆえに、付与された自主裁量の余地を有効なものとできるかは、時間の使い方が鍵となります。学生間及び候補生間の失敗はその大半を自分で拭うことができます。一方部隊での失敗は部下の犠牲及び労力によって拭われることになります。自分の努力不足で未来の部下を困らせることがないように、知識は必要不可欠になります。ある分野にだけ極端に詳しくなるよりは、満遍なく知っている方が役に立つ機会は多いです。苦手だと自覚している分野にこそ、積極的に触れることが大切だと思います。また、知識をもっていたとしても使えなければ意味はありません。知っていることを論理的に説明できなければいけませんし、問題に直面した際に思い出せなければなりません。講義、講話、読書、インターネット等から得た知識を自己の内で体系的に整理して、必要な時に記憶から呼び起せるようにするしくみを作っておくことが大切です。知識を使う経験を積むことが最も効果的だと思います。

最後に、防大学生時代の自分に伝えたいことを総括すると、防大は恵まれた環境にあるということです。自ら望んで、かつ、相応の努力をすれば機会が用意されています。学科面では他学科の授業を選択して取ることが出来ますし、概ね月１回は教授や先輩自衛官の講話を聴くことが出来ます。また、留学生と関わることで国ごとの特色を、小隊から学生隊に至る大小さまざまな規模の指揮官や幕僚を経験することで集団の特色を、校友会活動で強いチームの作り方を実践の場で学ぶことが出来ます。これらの機会は幹候校では防大ほど多く経験できるものではありません。迷うならば挑戦してみると将来の自分のためになると思います。だからといって、毎日なにか新しい特別なことに挑戦し続ける必要はありません。日常生活のなかで、大きく体調を崩すことなく、自分で決めたことを毎日やり続けさえすれば、自然と幹候校に向けた準備になります。毎日の生活の蓄積で、自然と知識が身についていくと思います。幹候校という未知数の生活について、正しく恐れながら、粛々と入校のための覚悟を決め、知識や経験を蓄える学校生活を送ってほしいと思います。

２０２６年8月２５日記